

少年少女
日本文学館

16

竹山道雄

たけやまみちお

ビルマの豎琴

birumanotategoto
takeyama
michio

少年少女
日本文学館

16

ビルマの竖琴

竹山道雄

講談社

913

竹山道雄

少年少女日本文学館 16

ビルマの豎琴

講談社 1986

270p 23cm

内容：ビルマの豎琴

たけやまみちお

少年少女日本文学館

第十六卷

ビルマの豎琴

定価

一四四〇円

(本体 一三九八円)

一九八六年一月二十七日

第一刷発行

一九八九年十二月十日

第五刷発行

著者……………竹山道雄

発行者……………加藤勝久

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©竹山保子 一九八六年

落し本・乱し本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてに願います。

Printed in Japan

ISBN4-06-188266-X

(児一)

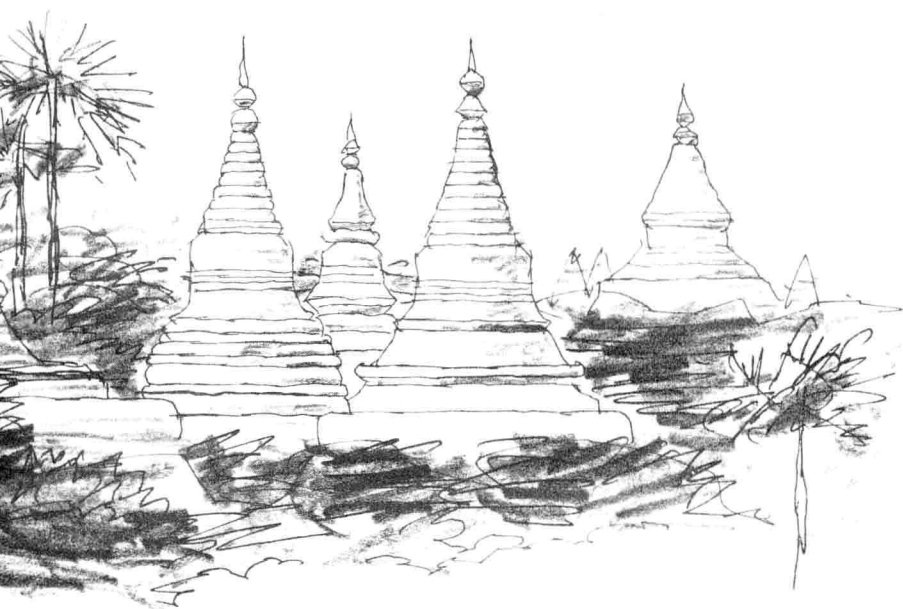
も
く
じ



竹山道雄
たけやまみちお

ビルマの
竖琴^{たてこ}……………5

● 略 ^{りやく} 年 ^{ねん} 譜 ^ふ ……………268	● 随 ^{ずい} 筆 ^{ひつ} ……………260	● 解 ^{かい} 説 ^{せつ} ……………253
	西尾 ^{にしお} 幹 ^{かん} 二 ^じ ……………	保昌 ^{ほしょう} 正 ^{しょう} 夫 ^お ……………





◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損うおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合はルビをとった。ただし、誤読のおそれのあるものは、左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

ビルマの
豎琴^{たてこ}
琴^と



兵隊さんたちが大陸や南方から復員してかえってくるのを、見た人は多いと思います。みな疲れて、やせて、元気もなくて、いかにも気の毒な様子です。中には病人になって、蠟のような顔色をして、担架にかつがれている人もあります。

こうした兵隊さんたちの中で、たいへん元気よくかえってきた一隊がありました。みないつも合唱をしています。しかもそれが、むずかしい曲を二重唱や三重唱で上手にうたうのです。横須賀に上陸したとき、出迎えていた人々はおどろきました。そうしてたずねました。

「きみたちはそんなにうれしそうに歌をうたって、何を食べていたのだね」

べつに食べ物がちがっていた訳ではないのですが、この隊はビルマにいたあいだ、いつも歌の練習をしていたのです。隊長が音楽学校を出たばかりの若い音楽家で、兵隊たちに熱心に合唱をおしえたのです。それで、この隊は歌のおかげで苦しいときにも元気がでるし、退屈なときにはまぎれるし、いつも友達同士の仲もよく、隊としての規律もたっていました。長い戦争の間には、

こうしたことがどれほど助けになったかわかりません。この隊が元氣よくかえってきて、出迎への人々をおどろかせたのは、こうした訳だったのです。

この隊にいた一人の兵隊さんが、次のような話をしてくれました。

第一話　うたう部隊

一

ほんとうにわれわれはよく歌をうたいました。嬉しいときでも、つらいときでも、歌をうたいました。いつ戦闘がはじまるかもしれない、そして死ぬかも分からない、せめて生きているうちにこれだけは立派にしあげて、胸一杯にうたっておきたい――、そんな気がしていたからかもしれません。隊の者はみな心からうちこんで練習をしました。それも、なるべく深みのあるすぐれた歌をうたいたがりました。下らない流行歌などはいやがって、誰も口にする者はありませんでした。それで、もちろんお百姓や労働者だった人が多いのですが、わが隊の合唱はずいぶん高尚なむずかしい曲までこなしていました。

いま思ひ出しても楽しかったのは、ある湖のほとりでした合唱です。

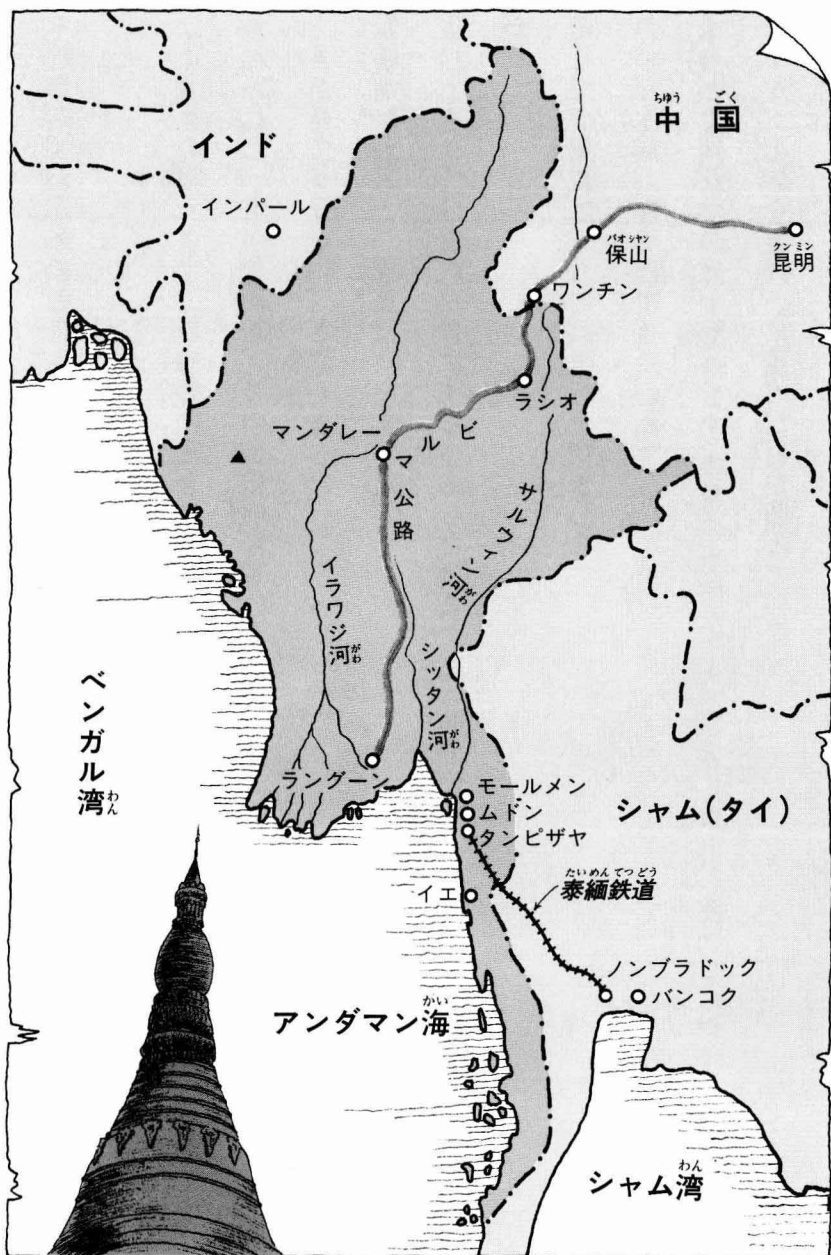
われわれは行軍をして、鬱蒼とした森の中の谷を下つてゆきました。すると行く手に湖が見え、そのまわりに町が白い斑点のようにうかんできました。

その町はむかしビルマの王様の離宮のあったところでした。入り江のほとりに白い壁の家が群がって、なかば水につかつて、影をうつしています。めずらしい形をした円屋根、鐘楼、尖塔などが空にそびえています。

この空の色が、熱帯ですからじつに綺麗なのです。蛋白石という宝石をご存じですか。ちょうどあのような白い色に光って、その中にさまざまな複雑な光がまじってキラキラとしているのです。こうした空に、あの円くうねった大理石の塔が立っているところは、まったく夢の中のようにでした。

われわれは三日ほどこの町に駐屯して毎日合唱しました。その曲は「春高樓の」だの「菜の花」のようなむかしなつかしいものから、賛美歌の節もあり、くだけたものでは「パリの屋根の下」^{（同名のフランス映画の主題歌）}、それからもつとむずかしいドイツやイタリアの名曲まであるというふうでした。

ここの湖のほとりで、隊長はうれしそうに指揮棒をふりました。われわれも胸の底から声を



だして、自分たちの合唱にきいきりながら、この絵のような湖にむかつて歌をうたいました。

それから、わが隊のお得意の「はにゆうの宿」を、三重唱四重唱にしてくりかえして練習しました。

「はにゆうの宿」——この故郷の家をおもう歌は、いつきいても心にしみ入るような曲です。

われわれはうたいながら、この目の前の景色を故郷の家の人たちに見せてやりたい、この歌の声をきかせてやりたい、と思いました。

合唱が終わると、隊長はいいました。

「よし、きようはこれだけにする。あしたはまたこの時間に、今度はあたらしい歌を練習する。分かれ」

そして、隊長は一人の兵隊をよびました。

「おい、水島、伴奏はできたかね」

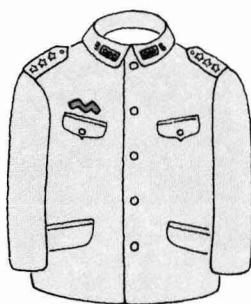
水島とよばれたのは上等兵です。中背のやせた人で、ひきしまった体は日にやけてほとんどまっ

黒ですが、大きなきれいに澄んだ目が凹んでいます。

この人はこの隊に入ってからをはじめて音楽を知ったのですが、元来天分があつたとみえて、みる

じょうとうへい
上等兵

きゆうにほんぐん かいきゆう
旧日本軍の階級の一つ。星印三
けんしやう
つの肩章をつける。



きゆう りく ぐん かいいきゆう
〔旧陸軍の階級〕

元帥げんすい

↓ 一等兵 (いとうへい) ↓ 伍長 (ごちやう) ↓ 准尉 (じゆんゐ) ↓ 大尉 (だいう) ↓ 大佐 (だいたさ) ↓ 大将 (だいたしやう)
 ↓ 二等兵 (にとうへい) ↓ 兵長 (へいちやう) ↓ 曹長 (そうちやう) ↓ 中尉 (ちゆうゐ) ↓ 中佐 (ちゆうさ) ↓ 中將 (ちゆうしやう)
 ↓ 上等兵 (じやうとうへい) ↓ 上等兵 (じやうとうへい) ↓ 軍曹 (ぐんそう) ↓ 少尉 (しやうゐ) ↓ 少佐 (しやうさ) ↓ 少將 (しやうしやう)

蘆あし 高たかさ二、三メートルのいね科の多年草。水辺に群生し、秋には紫色がかった穂をつける。よしともいつ。

みるうちに非常な上達をしました。自分でも夢中で音楽にこつて、寝てもさめても歌のことを考えていました。ことに、自分で楽器をこしらえて合唱の伴奏をするのですが、それがすばらしい腕前で、さまざまの曲にさまざまの伴奏をたちどころに作りしました。

いったいそんなところに行っていた軍隊に、楽器なんかがあつたのか、とおっしゃるのですか。ありましたとも、いろいろの種類のじつにめずらしい楽器がありました。

兵隊たちのもつていた楽器をあつめたら、面白い博物館ができる
 と思いますね。兵隊はどこに行っても、暇ができると、きつと誰か
 が楽器をつくります。中には専門家もいるのですから、不自由な材
 料をつかつて、びっくりするほど立派なものを作りだします。吹奏
 楽器は、蘆や竹をきつて穴をあけた簡単なものから、こわれた機械
 の部分品をとりつけた本式の喇叭まであります。打楽器なら、木の
 杵に犬か猫の皮をはった鼓から、ドラム缶に何かの皮をはったのま

で見たことがあります。虎の皮だといっていましたが、どうでしょうかね。とにかくすごい音がして、よく響いて、その隊では自慢にしていたものです。

隊によっては、どうして作ったものか、ヴァイオリンやギターまで持っているものまでありました。

われわれの隊で一番よく使われていたのは、一種の竖琴でした。

これはビルマ人がひく竖琴をまねて作ったものです。この国の太い竹を共鳴体の胴にしてあります。それに、やはり竹を曲げて上げて、絃をはります。絃は銅、鉄、またはアルミかジュラルミンの針金です。低い音をだすのは革紐です。こうした絃をはって、音程を合わせると、それもずいぶん苦心の末ですが、めずらしい竖琴ができました。

水島上等兵はこの竖琴の名人でした。いろいろな工夫して曲をつくって弾いていました。彼がこの竖琴をひくと、琵琶とピアノのあいだのような音がいくつもからみあって、風の中にただよいます。しかし、日にやけて戦闘帽をかぶった兵隊がこうしたやさしい楽器を抱いて、夢中になって弾いているのですから、はじめての人が見たら、きっとおかしくて笑いだしたでしょう。

いま、水島上等兵は隊長にいわれて、その竖琴で自作の「はにゅうの宿」の伴奏をひきました。